

インクルーシブ研修だより

No. 13

2017. 3. 21 杉並区立杉並第四小学校 高橋 浩平

療育的視点をもつ

先日、通級の指導をしている友人と話をしました。彼が言っていたのが、学校は「教育的視点はあるが療育的視点がない」ということでした。

いくつか例をあげてみます。

- (1) 給食当番をしない児童がいました。さぼりと見られ、注意をされていたのですが、実はアレルギーがあって、配膳作業そのものができなかったことがわかりました。
- (2) 黒板を書き写すことをしないで、いつも注意をされている児童がいました。よく調べてみると学習障害の書字障害で、そもそも字を書くことに困難を抱えていました。
- (3) じっとしていられず教室をよく歩き回っている子がいました。そのたびに注意をされていました。ところがよく調べてみると、神経過敏で、ちょっとした音に耐えられず、そのことから逃げるためにうろうろしていたことがわかってきました。

学校というところは、たしかに「指導する」「注意する」ことで子どもたちに適切な行動を身に付けさせてきた、という側面があります。そこは「教育的視点」として示されるところでしょう。

一方で近年、発達障害とよばれる子どもたちに対する対応については主として医師や発達に関わる関係者から「療育的視点から見る必要がある」ということもよく言われてきました。

ただし、このことは言うほど簡単ではありません。理由はあるにせよ、行動そのものは「わがままである」「自分勝手である」「ルールを守っていない」ということが現実目にあるわけですから、そこを注意しないと、今度は逆にまわりの子どもたちから「なぜ彼だけ許されるのだ」ということになってしまいます。

研究者の中には「そもそも同じカリキュラムを全員にやらせようとするから困難を生じるのだ」という方もいますが、現場にいる者としては、カリキュラムや教育内容のせいにしてもらちがあきません。

一つは指導者の中に、「療育的視点」、「こういう問題があるからこのような行動になっているかもしれない」という考えをもつことなのかな、と思います。

特別支援教育が制度化されてから10年がたとうとしています。この間「自閉症」「ADHD」「LD（学習障害）」「アスペルガー症候群」などの障害について、かなりの理解が深まってきたのも事実です。しかし、明確に発達障害とはいえない、でもどこか、なにかちょっと違う、という子どもも増えてきているように思います。そうした子どもたちにも、先に述べたような療育的視点をもって見ていくということが大切ではないかと考えています。

もう一つは「複数の目で、チームで子どもたちを見ていくこと」だと思います。支援の必要な子どもに限った事ではありませんが、これまでの小学校は、いまだに「学級王国」と呼ばれるような、担任がクラスの子を丸抱えで指導していく、という流れが少なからずあります。その流れからすると「問題を起こす子がいるのは担任の指導力が足りないからだ」といった論調にもおうおうにしてなりがちです。

もちろん、ケースによって指導力が問われる、ということも一面としてありますが、教育的視点だけでは問題が解決できない子どももいます。そうしたときに、複数の目で見る、チームで見る、担任まかせにしない、といったことが大事ではないかと思います。その中の一人が「療育的視点」を持っていれば、「こういう理由かもしれない」といったことが指導者の中に共有できるのではないかと考えます。

今年度の研修だよりはこれが最終号です。済美教育センターの白石所長のはからいで、センターの中でも読んでいただいていたこと、大変ありがたく、またプレッシャーでもありました。感謝申し上げます。来年度も、引き続き、研修だよりを作成していこうと思います。どうぞよろしくお願いします。

（＊杉四小のインクルーシブ教育をまとめたリーフレットを作成しました。拙いものですが、いろいろご意見をいただけると幸いです。）

杉四小のインクルーシブ教育とは

「できないことをほったらかしにしない教育」